

+

2022年

2月第3・4週の主日礼拝説教要約

・ 2月20日：マルコ福音書 2：13-17.

「治療を要する者たち」

・ 2月27日：マルコ福音書 2：18-22.

「その時に為すべきこと」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

アルファイという名の父親の子のレヴィという取税人が、ガリラヤ湖畔の取税所で関税(通行税, 流通税等)の徴収の業務を取り仕切っていると、その前を通り掛かったイエスが彼に声をかけて、従わせたというエピソードです。従ったのは、不正な取り立てをされるとの噂が絶えない職種を取税人です。刻々と変化する、彼らしか知りえない税率に、微妙に上乘せして算出された本来の税金との差額が、彼らの収入となる仕組みで、徴収される側の人々は、唯々諾々とその税額を支払うしかなかったのです。

ある日、その取税人のレヴィがイエスを自分の(父親の?)邸宅の晚餐に招いたことがありました。そこにはなぜか、パリサイ人の律法学者も同席しています。しかし彼の目には、イエスと弟子たちはまだしも、出席者の中に、曰く付きと思しき人々の姿が散見されます。知人のレヴィとは異なる、使用人の取税人やその他の罪人達までもが、よりによって、一線を越えて、一堂に会していたのです。たまたま近くにいたイエスの弟子に問い質します、「これは、一体どいうことなのか?」。すると、その場の遣り取りを察知したイエスが、弟子に代わって返答しました。

医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。私が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。

自宅に招待していたのは取税人のレヴィでしたが、その内実はイエスが招待したに等しい客層が殆どでした。

すると今度は、律法学者の方が微妙な立場に立たされます。彼もその輪の中に、一人の招待客としていたからです。彼が家の玄関付近で出入りの者達を見張っていた、などという苦し紛れの解釈は放棄されなければなりません。

さて、本来ならファリサイ人や律法学者は本能的にイエスを試みる側の人間です。もちろんイエスが神の子であることは、彼らには一切、明かされません。サタンなら、真相を知りつつ、なおもイエスを試みることでしょう。いずれにしても神を試みる輩は、一様にサタンと同様の行動を取ります。

けれども、イエスに招かれた罪人たちの中には、誰一人として、彼を試

みる者はいません。神を試みるという、被造物が犯してはならない最大の罪に加担する者はいないのです。そんな彼らこそ、率先して神の前に悔い改める者たちであり、神の国に一番近いところにいてそこに招き入れられる者たちであることを、イエスは確約しているのです。

その日、同席していたファリサイ派の律法学者も、全く同じ人間、悔い改めて、神の道、命の道へと進むべき人間なのでした。

説教 《 その時に為すべきこと 》

なぜ、私たちが断食をしても、あなたは見てくださらず、苦行をしても、知ってくださらないのですか。(聖書協会共同訳 イザヤ書58:3a)

彼らはハンガーストライキをしているわけではありません。誰かに向かって抗議をしているのではなく、神に対して、していることなのです。

人間には堪え忍ぶべき時があり、誰かから促されたり強いられたりするまでもなく進んで断食を行なう時があります。ただ、それが神に対して為されているということが忘れられると、人間の、人間による、人間のための断食と化してしまうのです。これはもう、念仏を唱えながら滝に打たれているのと同じです。その対象は、専ら自分自身や共同体のためにそうしているに過ぎません。

1世紀の中東地域のユダヤ人たちの目の前に、久しく待ちにし神の子が出現していたのだとしても、彼らは脇目も振らず断食を継続していたのです。自らに課した苦行として。

イエスに目を癒された人なら、癒した方が誰であるのかを見て知ります。けれども、その業を見ても信じない人には、引き続きイエスが誰なのかは見えないままなのです。

彼らは、発酵が止まった葡萄酒と同じです。水と同じく古い革袋に収める事ができます。神を前にしても、畏怖も歡喜も成長も悔い改めもありません。

けれども、新しく発酵が始まった葡萄酒は違います。こちらは通常の革袋では持ちません。本来なら樽が必要で、水瓶でも代用できます。なぜか、持運びが必要である場合にのみ「新しい革袋」を用いなければなりません。人が新しい人間として主と共に歩きだすように。

水は放置すると劣化します。人間も同じです。けれども、水にも神の手が加わると劣化しない美味しい葡萄酒が出来上がります。見えなかった目に色彩が与えられるように。人々は断食など、してる場合ではなかったのです。主を迎えて。

けれども、主が十字架に架けられる時が来ます。その時はきっと食事が喉を通らなくなるでしょう。しかし甦りの時が来ます。その時が来たなら、主は再び弟子たちと共に、食卓を囲むことになるでしょう。やがてパンと葡萄酒は聖なる出来事の記念として食される時が来るでしょう。

4 月 1 7 日 (日)

復活祭

(礼拝のみ)

* 受難週の集会はありません。